

伊藤明生・小川政弘作 「新学期2」

友人A おはよう！

友人B おはよう！

友人A 渡辺さん、おはよう！

渡辺和子 ……。

友人B おはよう、和子！

和子 ……。

友人A どうしたんだよ？

和子 ……。

友人B ヘンなの。返事もしないの。行こう行こう。

効果音 (学校のガヤ。始業ベル。教室のドアが開く音。)

鈴木先生 (セキ払い) えー、わたしがこの1年B組の担任の鈴木一郎です。みんなと最低1年間、付き合い合うことになりますが、よろしく。そうだね、まずみんなの顔と名前を知りたいから、出欠を取ることにしよう。出席番号順に呼ぶから、元気よく返事をして起立してくれ。(次ぎの点呼に、それぞれ「はい」の返事) 秋川次郎！ 伊東俊一。江原ひとみ。大川誠。加藤みゆき。

ナレーション 鈴木宣は、42人クラス全員の名前を、一人一人順番に呼んでいきました。しかし、42人目の名前を呼ぶと…。

鈴木先生 えーと、渡辺和子。…渡辺和子！ あれ、渡辺和子っていないのかな。出席簿が間違っているのかな。えーと、6列で、一列7人だから6、7(6×7)42人だよな。あれ？ 呼ばれてない人が1人いるのかな。こんな 世にも不思議なことがあるのかなあ。そうそう、その君、窓際が一番後ろの君は読んでないよな？ 君の名前はなんていうんだ？

和子 ……。

先生 ちよっと聞こえないよ。もう少し大きな声で。さては朝食食べてこなかったな？

和子 (か細い声で。渡辺和子です。)

先生 なんだ。いたならちゃんと返事をしなさい。冗談もいいけど、出欠の時にちゃんと返事をしないと、次からは欠席にするぞ。

ナレーション ここは青春高校1年B組。時は、期待と不安とで胸をいっぱいにして新学期を迎える春。野原では花々の香りが満ち満ちて、木々は青々とした新芽を出し、新しい未知の世界への期待でみんなの胸をわくわくさせている季節。そんな時に、一人 渡辺和子の心の中だけは、梅雨の季節のようにどす黒い雲が垂れこめていました。

音楽 (ブリッジ)

和子の母 あなた、和子、どうしたんでしょう。

和子の父 「どうした」って、どうかしたのか？

母 あなた、何のんきなこと言ってんのよ。自分の娘が普段と違うのも気がつかないの？ あなたって父親失格ね。

父 なんだ、父親失格とは！ おれは毎日会社でお前たちのために朝から夜遅くまでクタクタになって働いてるのに、なんだ、その口のきき方は！ まあいい。それで、和子はいつもとどう違うんだ？

母 あの子、もともとは明るくて陽気な子なのに、県立一校の受験に失敗してから少し変なのよね。バカなことを考えなきゃいいけど。

父 「バカなこと」って、まさか、お前…。

母 やっぱり今の受験制度がいけないのよ。あんなに夜も寝ないで一所懸命に勉強したのに落とすなんて、なんてひどい学校なこと！

音楽 (ブリッジ終わり)

鈴木先生 あ、あの一、わたし、和子さんの担任の鈴木と申します。初めまして、よろしくお願いします。

母 あ、いえ、こちらこそ。いつも和子がお世話になりました。どうぞお上がりになってください。取り散らかしておりますが、どうぞどうぞ。

鈴木 は、どうもすみません。(間)実は、あの、突然今日お宅にお邪魔したのは、和子さんのことなのですが…。

母 和子が、何か？

鈴木 いえ、あのですね。高校受験の折か、入ってから和子さんに何か変わったことがあったんでしょうか？ 学校で最初に和子さんにお会いした時から、なんとというか、非常に憤まんやりきれない、何かに不満を持っているようにお見受けしたので。何か心当たりでもお母様におありかと思ひまして。

母 そのことでしたら、私もどうしたらよいのか分かりかねて、先生にご相談申し上げようかと思っていたところなんです。実は、あの子は一番行きたかった県立一高に失敗したのが原因で、あのようにつきり内に閉じこもって、最近は親とも全く口をきこうとしないんですよ。

鈴木 ああ、そうだったんですか。それでは、今度一度ゆっくり和子さんとお話ししてみます。今日はもう遅いので、これで失礼します。

母 そうですか。お構いもしませんで、わざわざお寄りくださりありがとうございました。よろしくお願いします。

ナレーション そして、鈴木先生は、ある日の放課後、和子とゆっくり話す時を持ちました。

鈴木 渡辺さん、高校は面白い？

和子 うーん。あんまり…。

鈴木 高校より中学のほうが面白かった？

和子 うん。

鈴木 どうしてだと思う？

和子 だって。青春高校にしか入れなかったんだもん。

鈴木 それなら、県立第一高校に入れたら、高校生活は楽しかったかな？

和子 ……

鈴木 第一高校に入ったらどうした？

和子 東京の一流大学目指して頑張ったわ。

鈴木 ああ、そのために一高に入りたかったわけ。じゃどうして東京に一流大学に入りたいの？

和子 だって…。

鈴木 確かに、台孝江よりもこの青春高校はランクが低く、大学進学率も非常に低い。それでも、へたに大学受験を意識して、ガリガリ勉強ばかりしている第一高校の生徒よりも、高校生活を楽しんでいるうちの生徒はずっといいと先生は思っている。

和子 先生はわたしの将来と関係ないもんね。

鈴木 渡辺さんにとっては、東京の一流大学に入るのだけが望ましい将来なの？

和子 ……

鈴木 先生はね、第一高校から東京の一流大学に進んで一流企業に入って高給を取る人間よりも、この青春高校を出て、町工場で働いたり、家の仕事を継いだりする者のほうが好きだなあ。

和子 イヤだわ、こんなところで一生暮らすなんて。第一、ろくな勤め先ないし、お給料は安いし…。

鈴木 人の一生はお金では決まらないよ。あるに越したことはないけどね。人間、エリートコースを進むのも決して悪くはない。問題はね、渡辺さんがエリートコース以外は人間の生きる人生じゃないと考えてることだよ。

和子 そうは言っていないけど…。

鈴木 人の生き方にはいろいろあるよ。中にはエリートコースを歩む人間もいる。だけど一生を貧しくつつましく生きる人もいる。だけどそんな表面的なことで人間の価値は決まるもんじゃない。人はえてして身分や富や家柄を誇って他人を見下したがるが、我々人間をつくられた神様はそうじゃないぞ。

和子 神様？

鈴木 そう、この天地万物をつくられた、身に見えない神様だ。その神様は渡辺さんをもつくれたんだよ。君はその神様を知らないけれども、神様のほうは君をよく知っている。神様はえこひいきをしな。背の高い人、低い人を差別しない。運動のできる人、できない人を差別しない。もちろん勉強のできる人間、できない人間を差別しない。なぜなら、渡辺和子っていう人間は、この世にたった一人しかいないから。君という一人の固有な人間を、かけがいのない存在としてそのままに認め、愛してくれる。それが神様なんだよ。

ナレーション 和子は、不思議な気持ちで鈴木先生の話聞いていました。自分をありのまま受け入れてくれる神様のことなど、今まで考えたこともなかったからです。それは、思いもかけない人から、優しい言葉をかけられたときの戸惑いとうれしさに似ていました。

鈴木 渡辺さんは、一所懸命に勉強して、第一高校を目指した。でも残念なことにダメだった。君にしてみれば確かに第一高校に入れるに越したことはなかったかもしれないけど、今、君はこの青春高校の生徒なんだよね。いつまで文句言ってもしょうがないよ。今のこの与えられている“環境と時”を生かさなくっちゃ。そうだろう？

和子 うん。だけど、“あんなに頑張って、1年間何も遊ばないでやったのに”、って思うと悔しくて。神様って、こんなわたしの気持ち、ほんとに分かるのかなあ。

鈴木 うん、それじゃ、例えば粘土で陶器を作ることを考えてみよう。一つ一つの陶器は少しずつ違う。同じのはない。聖書では、神様が陶器師で、人間が陶器だと言ってるんだ。陶器師は自分の気に入った材料を使って、自分の思ったとおりに陶器を作る。しかも人間の陶器師には気まぐれもあるだろうけど、神様はそうじゃない。それぞれ違っていても、一つ一つ愛情を持って、丹精を込めて作られるんだ。渡辺さんに一番ふさわしい生き方を、神様はちゃんと備えていらっやるんだよ。

和子 …それじゃ、神様から見れば、わたしが青春高校に入ったってことは、一番いいことなのかなあ。

鈴木 そうだよ。先生の好きな言葉はね、「神様は最善以下のことはなさない」という言葉なん

だ。渡辺さん、気持ちを新しく持って、頑張ってくださいよ。

和子

「神様は最善以下のことはなさらない」——そうかあ。

ナレーション

和子は、ふくよかに香る校庭の沈丁花の香りを、胸一杯に吸い込んだのでした。

<完>